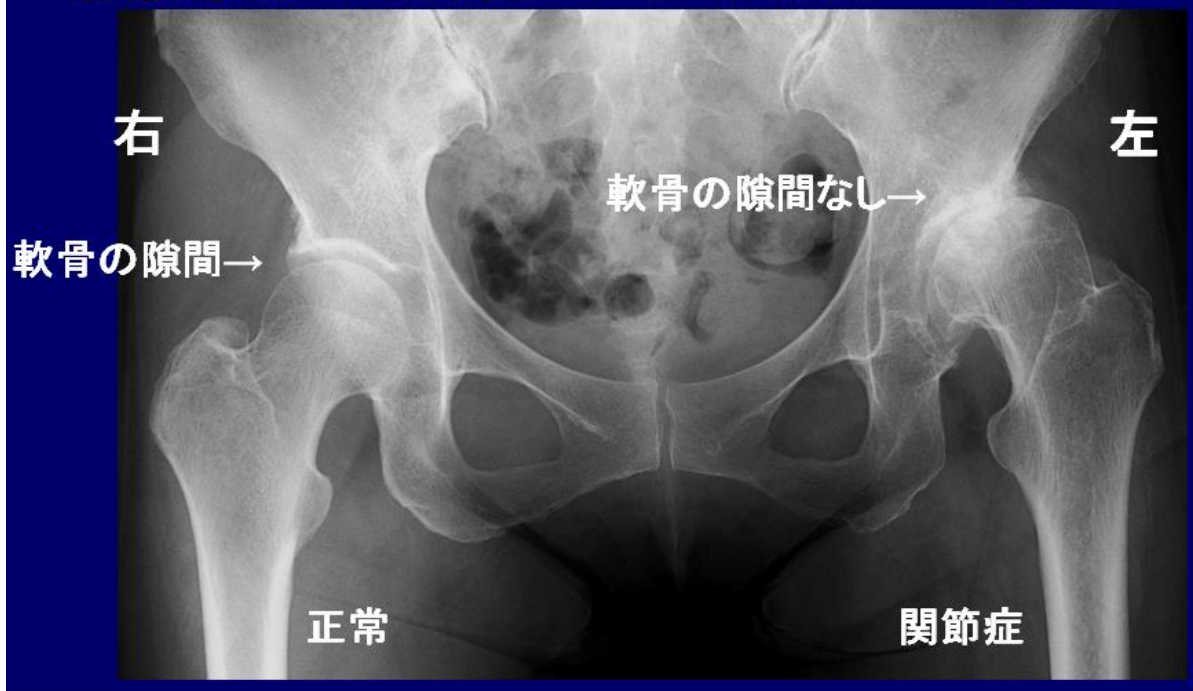


股関節の発育不全で生じる股関節症 (形成不全性股関節症)

整形外科: 小林千益、青木哲宏、中川浩之、出田宏和、黒河内大輔

1: 形成不全性股関節症とは

① 関節症: 軟骨がすり減り→痛み



関節症とは: このレントゲンで、右の股関節には軟骨の隙間があります。軟骨には神経が無く、すべすべして擦れ合っても痛みを生じません。

しかし、左の股関節では、軟骨が擦り切れ、軟骨の隙間が無くなり、神経がある骨同士が擦れ合い痛みを生じています。軟骨が擦り減り痛みを生じるようになった状態が関節症です。

② 関節症の原因による分類

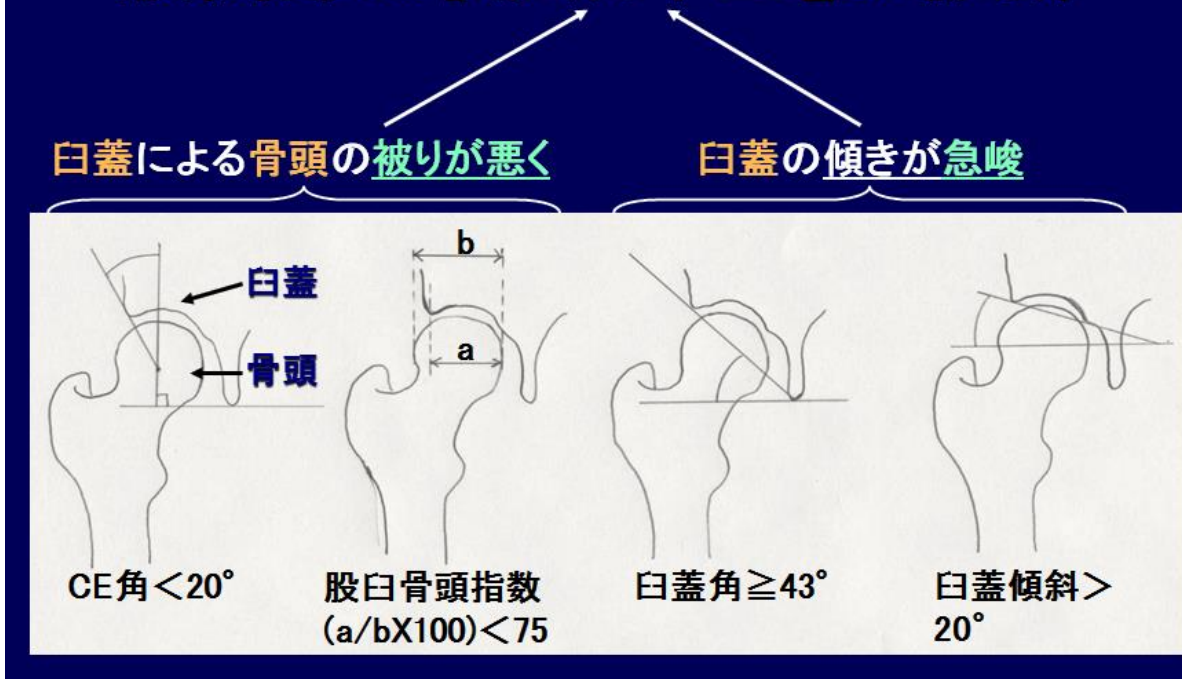
股関節症		
病名	原発性	形成不全性
明かな原因	ない	股関節の形成不全
人種差	欧米で過半数	日本で大部分

膝関節症	
病名	原発性
明かな原因	ない
人種差	欧米でも日本で大部分を占める

形成不全性関節症とは: 関節症で、明らかな原因が無いものを原発性とよび、膝では欧米でも日本でも大部分を占めます。

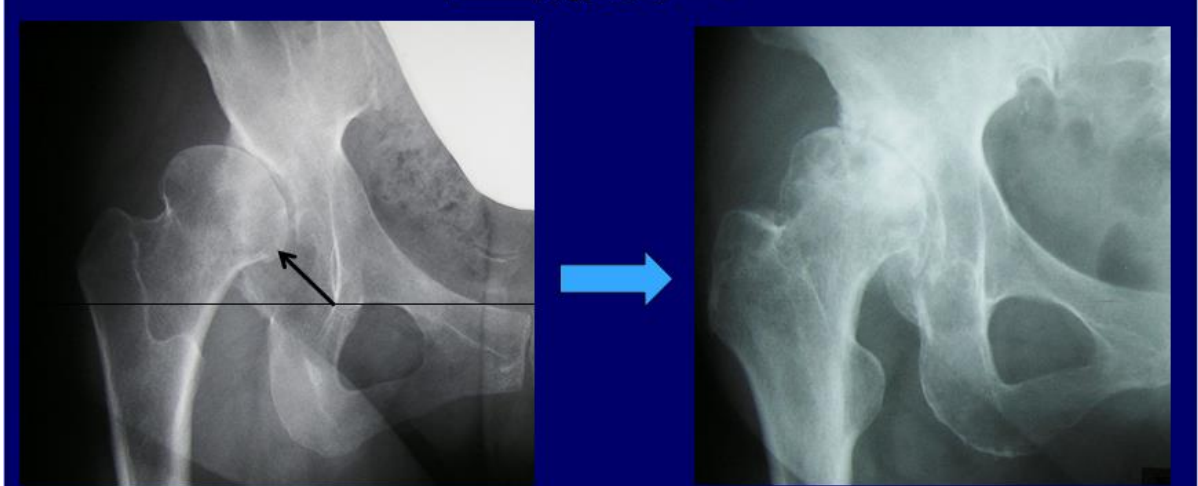
しかし、股関節症には人種差があり、欧米では原発性が過半数ですが、日本では形成不全によるものが大部分を占めています。

③ 股関節の『形成不全』の診断



形成不全の診断は: 図のようなレントゲン指標で行います。形成不全の特徴は、股関節の骨盤側の上の部分の蓋臼と呼ばれますが、臼蓋による骨頭の被りが悪く、臼蓋の傾きが急峻である事です。

④ 亜脱臼



形成不全と亜脱臼の程度が強いほど早く(低年齢)関節症になりやすい

亜脱臼とは: 形成不全の結果、大腿骨頭が上外側に外れかかった状態を亜脱臼と呼びます。

左のレントゲンでは矢印の分だけ骨頭が外れています。形成不全と亜脱臼の程度が強いほど早く低い年齢で関節症になり易いことが分かっています。

2: 症状と対応

① 症状: 初期～進行期



股関節症の初期～進行期には: ももの付け根の股関節の痛みがある事もあります。しかし、股関節痛がなく、太ももの痛みや、膝の痛みだけの方もいます。この方は、股関節痛がなく、左膝痛だけでしたが、膝には異常がなく、左の股関節の軟骨の隙間が著しく狭くなっており、股関節症による膝痛でした。もっと早く受診していれば、病気の進行を遅らせる生活指導やリハビリや骨切り術などができた可能性があります。ですから、付け根、太もも、膝の痛みがありましたら、整形外科を早めに受診して下さい。診断が遅れますと、病気の進行を抑える骨切り術などの治療のチャンスを逃すことになりかねませんので。

② 症状: 末期



末期には: 痛みが強くなり、歩行と日常動作が障害され、この方の様に、歩けず車いすの生活となる事もあります。そのような場合は人工股関節置換術を検討します。

③ 人工股関節置換術を行う場合

痛みが強く、歩行と日常動作が著しく障害され、ご本人が『手術を受けて痛みをとり、もっと歩け日常動作を改善したい』と願われた場合です。

年齢: 60歳以上が原則ですが、人工関節の素材の進歩で耐用性が良くなったので、症状が強い場合は50代でも行っています。



諏訪姫とハートちゃん (諏訪市と日本赤十字)